

里村穰の国語科（第2学年）研究計画

1 本研究で目指す子ども

本研究では、文学的な文章を教材とした「読むこと」において、**言葉と言葉を関係付けて読み、場面の様子や人物像をとらえる子ども**を目指す。「言葉と言葉を関係付けて読む」とは、言葉の意味に着目するという「見方・考え方」を働かせ、叙述を基に場面の様子や登場人物の行動を具体的に想像する力等の資質・能力を発揮している姿である。例えば、「この言葉とこの言葉は、場面（登場人物）が〇〇ということを表している言葉だ」などのように、場面や登場人物に関わる複数の言葉を関係付けて読む姿である。「場面の様子や人物像をとらえる」とは、場面や登場人物に関する複数の言葉を根拠として、場面の様子や人物像を表現している姿である。

これまで、場面の様子や人物像をとらえさせる指導を行ってきた。しかし、例えば「ここに〇〇と書いてあるから、〇〇な場面（登場人物）だと思う」などと、場面の様子や人物像を単線的にとらえる子どもの姿があった。このような姿は、「目的に応じて複数の情報を関連付けて理解を深めることに課題がある」という中教審答申での指摘ともつながる。

この原因は、「どの言葉からそう思ったのか」などと根拠を問う指導で留まっていることにある。前述のような子どもは、場面の様子や登場人物に関する直接的な表現の言葉に目を向けるものの、間接的な表現の言葉にまで目を向けなかった。「その言葉から何が分かるか」という言葉の意味に着目させる指導が足りていないのである。そのため、場面の様子や登場人物に関する複数の言葉を関係付けて読むことができず、結果、それらの言葉を根拠として場面の様子や人物像を表現するに至らなかったのである。

そこで、目指す子どもの具現を図るために、次の2点の改善を行う。1点目は、場面の様子や人物像の根拠となる直接的な表現の言葉と間接的な表現の言葉とを例示する。間接的な表現の言葉を示されることで、子どもは「どうしてその言葉が根拠となるのだろうか」などと、言葉の意味に着目した問いをもつ。2点目は、話し合いの観点（どの言葉か・その言葉を選んだ理由は何か）を提示して検討の場を設定する。言葉と言葉を関係付けるためには、文章の文脈に即して、「この言葉から〇〇ということが分かる」という言葉の意味を吟味する必要がある。この言葉の意味から、言葉と言葉との共通や相違等を関係付けて読めるからである。子どもは、文章の文脈に即した言葉の意味に着目し、言葉と言葉を関係付けていくことで、場面の様子や人物像をとらえる。

2 本研究で育成する資質・能力

①知識・技能	②思考力・判断力・表現力	③態度
○言葉の特徴や使い方に関する知識・技能	○叙述を基に場面の様子や登場人物の行動を具体的に想像する力 ○文章の中の重要な言葉や文を選び出す力	○目的に応じて読書しようとする態度

3 主張する働き掛け

単元の導入では、まず、「物語を紹介する」という言語活動とこの言語活動に対応した成果物の基版とを提示し、文章と出合わせる。次に、文章を読み聞かせたり音読させたりした後、登場人物と出来事とを問うて内容の大体をとらえさせる。そして、「どの場面（登場人物）が一番『すてき（面白い・お気に入り）』だと思ったか。どうしてそう思ったか。どの言葉からそう思ったか」などと問う。子どもは、一番だと思った場面や登場人物とその根拠とを表出する。しかし、場面の様子や人物像を単線的にとらえている（C0）。このような子どもに、次のように働き掛ける。

働き掛け1

根拠となる言葉を複数提示し、感じた疑問とその理由とを問う。

言葉の意味に着目した問いをもたせるための働き掛けである。

まず、一番だと思った場面や登場人物の結果を伝える。その後、一番だと思った場面の様子や人物像の根拠となる言葉を複数提示する。その際、直接的な表現の言葉と間接的な表現の言葉とを示す。こうすることで、子どもの認識にズレを生ませるのである。子どもは、「自分の考えていた言葉とは違う言葉がある。どうしてその言葉なのだろう」などと、提示された言葉と自分が挙げた言葉との相違に気付き、疑問を感じる。

次に、感じた疑問とその理由とを問う。理由を表出させることで、言葉の意味に着目した学習課題の設定へとつなげるのである。自分の考えていた言葉とは異なる言葉が挙げられることで、子どもは、「どうしてその言葉が場面の様子（人物像）が分かる言葉なのか」などと、**場面の様子（人物像）に関する言葉の意味に着目し、場面の様子（人物像）と言葉とを関係付ける「見方・考え方」**を働かせ始める。このような子どもの疑問をまとめ、「どの言葉から、どのような『素敵（面白い・お気に入り）』な場面の様子（人物像）が分かるか」という学習課題を設定する。

働き掛け2

提示した言葉を分類掲示して分かることを問うた後に、どのような言葉を見付けるか、見付けるためにどうするかを問う。

課題解決の見通しをもたせるための働き掛けである。

まず、提示した言葉を分類して掲示し、これらの言葉から分かることを問う。こうすることで、考える手掛かりをつかませるためである。次に、課題を解決するためにはどのような言葉を見付けるとよいか、見付けるためにどうするかを問う。子どもは、**場面の様子（人物像）に関する言葉の意味に着目し、場面の様子（人物像）と言葉とを関係付ける**「見方・考え方」を働かせ、「場面の様子（人物像）の分かる言葉がどれかを探して、その言葉から分かることを考えればよい」「そのためにはもう一度文章を読む」などと、目的に応じて読書しようとする態度（③態度）を発揮して、課題解決の見通しをもつ。また、「友達と相談しながら、どの言葉なのかを考えたい」などの方法も挙げる。「その言葉から分かることを考える」などの発言を受けて、ツールを与える。

働き掛け3

話し合う観点を提示して少人数グループで話し合う場を設定した後、必要な言葉を問う。

言葉を吟味させ、場面の様子（人物像）の根拠となる言葉を判断させるための働き掛けである。

話し合う観点を提示して少人数グループで話し合う場を設定する。提示する観点は、「どの言葉か。その言葉から分かることは何か」である。こうすることで、文章の文脈に即して言葉を吟味させるのである。子どもは、**場面の様子（人物像）に関する言葉の意味に着目し、場面の様子（人物像）と言葉とを関係付ける**「見方・考え方」を働かせ、言葉の特徴や使い方に関する知識・技能（①知識・技能）や、叙述を基に場面の様子や登場人物の行動を具体的に想像する力（②思考力・判断力・表現力）を発揮して、場面の様子や登場人物に関わる複数の言葉を選ぶ。その際、少人数グループで話し合い（協働性）、その言葉から分かることをツールに書き込みながら（ツール活用能力）、文章の文脈に即して言葉を吟味していく。

その後、場面の様子（人物像）を伝えるために必要な言葉を問う。子どもは、**場面の様子（人物像）に関する言葉の意味に着目し、場面の様子（人物像）と言葉とを関係付ける**「見方・考え方」を働かせ、文章の中の重要な言葉や文を選び出す力（②思考力・判断力・表現力）を発揮して、場面の様子（人物像）の根拠となる複数の言葉を判断する。

働き掛け4

言語活動に応じた表現の場を設定する。

複数の言葉を根拠として、場面の様子や人物像を表現させるための働き掛けである。

言語活動に応じた表現の場（「お話のとびら」・紙芝居・演劇等）を設定する。子どもは、必要だと判断した複数の言葉を根拠として、場面の様子や人物像を表現する。このようにして、**言葉と言葉を関係付けて読み、場面の様子や人物像をとらえる子ども（Cn）**となる。

働き掛け5

場面の様子や人物像をとらえることができた理由を問う。

発揮した様々な資質・能力の自覚を促すための働き掛けである。

場面の様子や人物像をとらえることができた理由を問う。子どもは、ここまでの学習を振り返り、「場面の様子（人物像）の分かる言葉がどれか、その言葉から何が分かるかを考えながら読んだからだ」などと、発揮した様々な資質・能力を自覚する。

4 検証

(1) 検証すること

- ① 構想した働き掛けにより、想定したCnになったか。
- ② 構想した働き掛けにより、想定した「見方・考え方」を働かせることができたか。
- ③ 構想した働き掛けにより、想定した資質・能力を発揮することができたか。

(2) 検証の方法

- ① 働き掛け4を受けて、場面や登場人物に関わる複数の言葉を根拠として、場面の様子や人物像を表現しているかを、言語活動に応じた成果物の内容から検証する。
- ② 働き掛け1を受けて、言葉の働きに着目するという「見方・考え方」を働かせていたかを、ワークシートの記述内容や発言内容から検証する。
- ③ 働き掛け2・3を受けて、叙述を基に場面の様子や登場人物の行動を具体的に想像する力等、想定した資質・能力を発揮していたかどうかを、文章を読んでいる様子、発言内容、ツールやワークシートの記述内容から検証する。

5 年間の授業計画

- (1) 指定研究授業 (7月) 『すてき』を見つけて紹介しよう (教材名：お手紙) (8時間)
- (2) 中間検討会 (9月) 「ここがわたしの『おもしろい場面』」(教材名：名前を見てちょうだい) (10時間)
- (3) 初等教育研究会 (2月) 「開演！劇団Max Smile (教材名：ニャーゴ)」(18時間)